

令和元年6月28日現在

機関番号：12301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13467

研究課題名（和文）重複障害教育における行動観察教育プログラムの開発と効果検証に関する日韓共同研究

研究課題名（英文）Japan-Korea Joint Research on the Development and Effectiveness Verification of Behavioral Observation Training Program in the Education of Children with Multiple Disabilities

研究代表者

任 龍在（Lim, Yongjae）

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：10614604

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、重複障害教育（特に、実態把握）の質的向上を図るために、行動観察教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。対象者は、特別支援教育を専攻している日韓の大学生であった。研究の結果、行動観察教育プログラムは、重複障害児の実態把握に必要な専門性向上を促進するものであることが示唆された。今後、このプログラムは、特別支援教育に携わる教員を目指す学生を対象とした大学授業（教員養成）の1つとして位置付けるとともに、重複障害児（肢体不自由・知的障害を併せ有する児童生徒）を担当する現職教員を対象とした職務研修（現職教育）の1つとしても適用したいと思う。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、重複障害児の実態把握に用いる行動観察教育プログラムを開発し、その効果を検証した。本研究の成果は、韓国の国立特殊教育院がまとめた、肢体不自由や重複障害のある児童生徒のための指導と支援ガイドブックでも紹介された。今後、本研究の成果をもとに、国内外の学会で発信するとともに、日韓の教員養成と現職教育の改善に取り組みたいと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this Japan-Korea joint research is to develop Behavior Observation Education Training (BOTP) using in the psychological assessment of children with multiple disabilities, and to examine effectiveness of the use of BOTP based on experimental researches of university students who are majoring in special education. The results have shown that the BOTP is useful in the psychological assessment of children with multiple disabilities. Therefore, next researches need to modify the BOTP in order to increase its effectiveness for teacher education (pre-service and in-service education) in Japan and Korea.

研究分野：特別支援教育

キーワード：行動観察 重複障害 肢体不自由 知的障害 実態把握

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 重複障害児の定義と実態

本研究では、肢体不自由と知的障害を併せ有する児童生徒を「重複障害児 (**Child with Multiple Disabilities**)」と定義する。

特別支援学校に在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化の傾向が著しく、特に特別支援学校(肢体不自由)においては七割の児童生徒が重複障害学級に在籍している。

### (2) 重複障害児の教育課程

学習指導要領の「重複障害者等に関する教育課程の取扱い」によると、知的障害を併せ有する児童生徒については、各教科・科目又は各教科・科目の目標及び内容の一部を、特別支援学校(知的障害)の各教科の全部又は一部と代替することができるとしている。さらに、重複障害児のうち、学習が著しく困難な場合は、各教科・科目若しくは特別活動の目標及び内容の一部又は各教科・科目若しくは総合的な学習の時間に替えて自立活動を主とした指導を行うことができるとしている。しかしながら、自立活動の指導については、目標や内容を選定する際の観点として**6**区分**26**項目を示しているが、その目標や内容、そして方法等に関する具体的な記述は見られない。つまり、重複障害児の指導は、子ども一人ひとりを実際に担当する教師の専門性に委ねているといえよう。

### (3) 重複障害児の指導における実態把握の重要性とその主な方法

重複障害児の教育的ニーズに応じた指導を行うためには、指導の目標や内容、そして方法等を設定するための根拠となる実態把握(心理アセスメント)を的確に行う必要がある。実態把握の主な方法としては、保護者や他の専門家から直接的に情報を収集する面接法、児童生徒の行動を観察して分析する行動観察法、標準化された検査を通して客観的なデータを収集する検査法といった**3**つの手法が幅広く用いられる。しかし、重複障害児の場合には、検査法や面接法を用いるにあたって現実的な限界(適用可能な検査法が少ない、他の専門家と面接する機会が少ないなど)があり、行動観察法に頼る部分が大きいと言われる。

### (4) 重複障害児の行動観察における客観的なマニュアルと教育プログラムの不在

重複障害教育では、行動観察の重要性が示唆されているものの、児童生徒の行動をどのような視点から分析すればいいのか、その具体的な視点と方略について客観的に説明するマニュアルはほとんど見られない。つまり、重複障害児を指導する教師は、行動観察での解釈が主観になりやすい問題から離れることができないままに、悩みながら日々の実践に取り組んでいるといえる。このため、重複障害児の指導及び支援の質的向上を図るためには、行動観察マニュアルを作成し、そのマニュアルに基づいた行動観察教育プログラムを開発する必要がある。

行動観察マニュアルについては、科学研究費補助金(課題番号:**26590140**)の成果として第**1**案が作成されたため、本研究では、その第**1**案に基づいた行動観察教育プログラムの開発と効果検証に取り組むたい。また第**1**案の改善にも力を入れたい。

### (5) 客観的な指標としてのアイ・トラッキング(eye tracking)

本研究では、行動観察を客観的な指標で評価するために、アイ・トラッキングに注目する。アイ・トラッキングは、科学研究費補助金(課題番号:**24653176**)により、行動観察場面を解釈する客観的な指標の**1**つとして有効であることが認められた。

## 2. 研究の目的

本研究では、重複障害児の実態把握に用いる行動観察マニュアルをもとに、行動観察教育プログラム(行動観察上の効果的な視点と方略を提示するガイドライン)を開発し、日韓の大学生を対象としてその効果を検証することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象者

特別支援教育を専攻している日韓の大学生**40**名(日本**20**名,韓国**20**名)。個人属性は省略。

### (2) 実験映像

肢体不自由と知的障害を併せ有する重複障害児(**6**歳,大島分類「**7**」)の映像**9**分**30**秒を用いた。映像の内容は、授業、移動、食事、そしてコミュニケーションなどの**10**場面であった。

### (3) アイ・トラッキング装置

実験には、竹井機器工業(株)の**Free View**と**Talk Eye Lite**を用いた。**Free View**と**Talk Eye Lite**は、頭部運動を固定した被験者の左右一方の眼球上の近赤外線反射輝点と瞳孔中心を検出して、相対的な偏差からリアルタイムに眼球運動(視点情報)を得るものである。被験者に与える刺激としての映像ならびに視点の動きは**DVD**に記録すると共に座標数値データとして記録する。

#### (4) 行動観察教育プログラム

行動観察教育プログラムの内容は、毎年、バージョンアップのための修正を行うため、ここでは平成 29 年度に実施した内容の概要を以下に述べる。

行動観察教育プログラムは講義（90 分×10 コマ）演習（90 分×5 コマ）そして課題（個別の指導計画と指導案の作成）の 3 つで構成されている。

まず、講義（事前指導，7 コマ）では、重複障害児の実態把握の基本を説明し、学生の理解を高める時間を設けた。講義は、実態把握の 3 段階（情報収集，検査，行動観察）実態把握基準（発達年齢と生活年齢，小・中学校と特別支援学校の学習指導要領等）個別の指導計画と指導案の作成法と有意事項などで構成された。

次に、演習では、重複障害の事例（実験映像と異なるもの）を用いて 情報収集から行動観察に至るまでの個別作業（必要な情報は授業者が提供した）個別作業で得られた情報をもとに各グループ（4～5 名）の実態把握図を作成する集団作業（KJ 法を活用した）を行った。における必要な情報は、生徒の検査記録、保護者の記録、教師の記録、医師の診断書、授業映像などであった。

最後に、課題（事後指導 3 コマを含む）では、演習で得られた実態把握図をもとに、個別の指導計画と指導案（自立活動）を作成するように課題を出した。課題提出後、発表と討論を実施した。

#### (5) 実験

実験では、日韓とも、本研究の対象者を行動観察教育プログラムの受講群と非受講群に分け、両群の比較検討を行い、プログラムの効果を検討した。実験は、科学研究費補助金（課題番号：26590140）のものと同様である。

実験は、アイ・トラッキングとインタビューの 2 段階で行われた。まず、対象者に実験の流れを説明した後に実態把握シート（研究代表者作成）を与えた。対象者は実験映像を観ながら実態把握シートを作成する。実験映像視聴では、Rewind を除いた Play、Pause、Stop 機能を自由に使いながら、対象児の行動観察を行うようにした。実態把握シートの作成後、対象者に「課題の適切性を確認するために、もう一度観たい場面を 1 つ選んでください」とし、その場面を見る際に、アイ・トラッキングを実施した。対象者に与えた刺激としての映像ならびに視点の動きは録画するとともに、座標数値データとして記録した。アイ・トラッキング終了後には、インタビューを行った。質問は、まずもう一度観た場面を選んだ理由は何か、その場面を観た際の注視点はどのような部分であったのか、なぜその部分であったのかなどアイ・トラッキングを行った場面についてであった。次に、実態把握シートに記載した内容に基づいて、実態把握結果について尋ねた。実態把握シートと関連質問については省略。

#### (6) 行動観察教育プログラム全般に関するインタビュー調査

実験終了 1 か月後、プログラム受講者を対象として、行動観察教育プログラム全般に関するインタビュー調査を実施した。調査は、フォーカス・グループ・インタビュー（FGI: Focus Group Interview）で行われ、対象者は実態把握結果が優れた学生 10 名（日本 5 名，韓国 5 名）であった。FGI で用いた質問は、行動観察教育プログラムのメリットとデメリット（デメリットの場合、その改善案を含む）などであった。調査時間は概ね 90 分であり、調査場所は大学の教室であった。

#### (7) 分析

まず、アイ・トラッキングの量的データとインタビュー記録（質的データ）の関連を分析して、対象者の行動観察特性（視点と方略）について整理した。受講群と非受講群のデータと科学研究費補助金（課題番号：26590140）で得られた熟練教師のデータを比較検討した。

次に、FGI の記録を分析し、行動観察教育プログラムのメリットとデメリット、そして改善案を整理した。

### 4. 研究成果

#### (1) 行動観察教育プログラムの効果と今後の課題

受講群と非受講群の結果を見ると、受講群の実態把握（行動観察）データが熟練教師のデータの一貫率が高く、非受講群と有意な差が見られた。つまり、行動観察教育プログラムは、学生の実態把握に必要な専門性向上を促進するものであるといえる。しかし、本研究の結果については、その内容を学術論文として発信（公開）していないことから、ここでは詳細なデータを提示して説明することはできない。



Fig. 1 講義内容（資料）の例

今後、本研究の成果をもとに、教員養成と現職教育の質的向上の観点から、行動観察教育プログラムの一般化を目指した改善に取り組みたいと思う。本研究の実験から得られた結果はもちろんだが、FGIで言及された改善案をふまえ、チームアプローチの検討、障害乳幼児教育への適用、重度・重複障害教育への適用などについて検討し、プログラムを改善したいと考える。

## (2) 研究成果の国際的な発信と国際的なネットワークの形成

まず、本研究の成果は、日本、韓国、中国等の国際会議で発表した。**2017 Spring KSSE International Conference** (2017年, 韓国)、韓国肢体・重複・健康障害教育学会 **2017年度冬季学術大会** (2017年, 韓国)、**The 2016 International Forum on Education for Children with Autism** (2016年, 中国)、**The 9th Chang-Pha International Symposium** (2016年, 韓国) などであった。

次に、著書等の出版物は、忠清南道教育庁(韓国)の「教師のための障害乳幼児指導・保育ガイドブック」(2017年)、国立特殊教育院(韓国)の「重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト(全5冊, 2018年)」と「**The Parent's Guide to Support Adults with Disabilities : Physical Disability**」(2018年)などであった。これらは、肢体不自由や重複障害のある乳幼児、児童・生徒、そして成人のための指導と支援ガイドブックであり、現場で教科書として幅広く用いられている。

今後、本研究の成果である「行動観察教育プログラム」は、特別支援教育に携わる教員を目指す学生を対象とした大学授業(教員養成)として設定するとともに、肢体不自由及び重複障害のある児童生徒を担当する現職教員を対象とした職務研修(現職教育)としてプログラムのバージョンアップを推進する。また、本研究により構築された国際的なネットワーク(特に、韓国)を活かし、アジア諸国を中心に、重複障害教育における途上国支援、すなわち国際貢献活動を展開していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

任龍在、趙成河、韓国における障害乳幼児教育の現状と課題、発達障害研究、査読無、第39巻第4号、2017、349-356 DOI: なし

丹野傑史、Dang Thi Phuong Mai、石阪菜未、山ノ上奏、任龍在、安藤隆男、ベトナム人大学生の肢体不自由児イメージおよび肢体不自由教育観 - 特殊教育学部の学生を対象に -、障害科学研究、査読有、第40巻、69-80 DOI: なし

[学会発表](計 9件)

任龍在、崔珍赫、文昭英、権彦男、金旻慶、加藤隆芳、朴在國、障害者の高等教育と生涯学習に関する日韓のイシューと展望、日本特殊教育学会第56回大会、2018年9月22日、大阪国際会議場(大阪)

任龍在、重複障害児の実態把握におけるチームアプローチの有効性、日本特殊教育学会第55回大会、2017年9月18日、名古屋国際会議場(愛知)

任龍在、趙成河、韓国における障害乳幼児教育の現状と課題 - 教育機関の利用状況を中心に -、日本発達障害学会第52回研究大会、2017年8月12日、群馬県社会福祉総合センター(群馬)

趙成河、任龍在、韓国における重度・重複障害教育研究の動向と課題、日本発達障害学会第52回研究大会、2017年8月12日、群馬県社会福祉総合センター(群馬)

Lim, Y. & Kumada, Y., A study on the Special Educational Problems of Multicultural Children with Disabilities in Japan, 2017 Spring KSSE International Conference, May 13, 2017, Pusan National University (Korea)

Sakurai N., Suzuki T., Takahashi T., & Lim Y.、群馬大学の特別支援教育教員養成課程における教育実習の運営と課題、韓国肢体・重複・健康障害教育学会 2017年度冬季学術大会、2017年1月12日、釜山大学(韓国)

任龍在、岡本明、吉本活二、中村広幸、情報アクセシビリティと就労・大学教育、情報通信学会第35回大会、2016年12月3日、芝浦工業大学(東京)

Lim Y., Effectiveness of Educational Technology in Special Education, The 2016 International Forum on Education for Children with Autism, November 21, 2016, Zhejiang University of Technology (China)

Lim Y. & Shimoda H., The Importance of Understanding of Disabilities and the Use of ABA in Educational Support for Developing Countries, The 9th Chang-Pha International Symposium, May 5, 2016, Daegu University (Korea)

[図書](計 8件)

任龍在 編著、가 6 (**Parent's Guide to Support Adults with Disabilities : Physical Disability**)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

李美淑 編著、 . 가 . : 가 ( 重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト： 個人余暇活動)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

李美淑 編著、 . 가 . : 가 ( 重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト： コミュニティ余暇活動)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

李美淑 編著、 . 가 . : 가 ( 重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト： 文化芸術余暇活動)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

李美淑 編著、 . 가 . : 가 ( 重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト： 地域社会余暇活動)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

李美淑 編著、 . 가 . : 가 ( 重度・重複障害学生の余暇活動のための教授・学習テキスト： 現場体験ガイドブック)、国立特殊教育院(韓国)、2018年11月

小林秀之、米田宏樹、安藤隆男 編著、特別支援教育： 共生社会の実現に向けて、ミネルヴァ書房、2018年3月

金參燮 編著、 : 0~1 (Teacher's Guide to Teaching Infants with Disabilities)、忠清南道教育庁(韓国)、2017年12月

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：高橋 甲介

ローマ字氏名：TAKAHASHI, Kosuke

所属研究機関名：長崎大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：10610248

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：キム・ヨンウク

ローマ字氏名：KIM, Yongwook

研究協力者氏名：パック・ゼック

ローマ字氏名：PARK, Jaekook

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。